

北山文化環境ゾーン整備推進 についての検討報告

～ 文化と環境に包まれたやすらぎと交流の中で、京都を世界に発信する街を目指し、
開放感あふれ、歩いてまわりたくなる街となるために ～

平成21年10月
北山文化環境ゾーン整備推進委員会

目 次

I 趣 旨	1
II 現状と課題	1
III 街づくりの考え方	6
IV 総合資料館と府立大学とが連携する新施設の整備の方向性等	11
V 府立植物園の整備の方向性等	14
VI その他検討を要する課題	15

I 趣 旨

1 北山地域が府民が憩い、やすらぐ場として、また、文化・環境・学術の交流・発信拠点となるよう、将来像の基本的方向性『街区構想』を描くために検討するものである。

※ 本報告書において「北山地域」とは、特にことわりのない限り、賀茂川、北山通、下鴨中通、府立大学南側通に囲まれた地域を指す。



※ 北山地域の航空写真

2 北山地域の府立の3施設では、既にその役割・方向性等を明確にするとともに、各機関がより緊密に連携し、相乗効果を上げる必要があるとの認識のもと、所要の検討を加えている。

○ 「府立植物園の未来図」夢プラン

・ 府民の思いに応える植物園を目指す

○ 京都府立総合資料館基本構想

・ 「京都に関する資料を収集・保存・提供する拠点」として、学術・文化の振興と府民サービスの充実を図る

○ 公立大学法人中期目標・中期計画

・ 知の拠点として、幅広い教養、高度の専門的な知識及び高い倫理観を備えた人材を育成
・ 大学や地域の多様な主体と協力・連携した研究成果等の活用、京都文化の発信

II 現状と課題

1 北山地域の立地環境

(1) 地理的位置



○ 京都市域のほぼ中央、京都市街地の北部に所在。西に賀茂川、北及び東に幹線道路、南に地域生活道路に囲まれている。

(2) 文化的位置

- 植物園が設置されるまでは、下鴨神社から上賀茂神社の一帯は、農耕地が広がり、半木神社の森だけが目立つ地域で、代表的な京野菜の賀茂なすの栽培をはじめ京漬物のすぐきの生産でもよく知られた地域であり、現在も地域の北側の上賀茂の一部では、同様の光景を目にすることができる。
- 世界文化遺産に登録されている上賀茂神社及び下鴨神社の中間にあり、また、古来賀茂の地とされた地域の中央に存し、植物園内には、上賀茂神社の境外摂社・半木神社が鎮座する。
- 近辺（ほぼ1 km圏内）には、京都工芸繊維大学、ノートルダム女子大学、大谷大学、府立洛北高校、高麗美術館、京都ギリシャローマ美術館、京都市北文化センターが所在し文化的な集積が見られる地域となっている。また、京都国際会館、京都産業大学、円通寺、深泥池（国の天然記念物）が近くにある。

(3) 交通上の位置

- 地下鉄烏丸線と北山通・北大路通が交わる地点に近く、交通の要衝となっている。京都市街の交通の背骨とも言える地下鉄烏丸線の北山駅が域内に所在し、国際会館駅へは2駅4分、京都市街地中心部四条駅から12分、京都駅から16分、東京から2時間50分、関西国際空港からは1時間50分で結ばれている。
- 京都市バス4系統は、京都駅から京都一番の繁華街である河原町通を貫通し、大阪から直接乗り入れている京阪電車の終着駅出町柳駅、下鴨神社、京都工芸繊維大学附近、ノートルダム女子大学を經由して、北山駅、高麗美術館、上賀茂神社を一つの路線で結んでいる。また、京都市バス北8系統は、北山通、千本通、北大路通、白川通の循環系統で、1 km圏内施設に加え、仏教大学、大徳寺、船岡山公園、京都市北図書館、京都造形芸術大学を結んでいる。
- 京都バス45系統は、京都駅から烏丸通を貫通し、北大路通、下鴨本通、北山通、北山駅前経由、深泥池、京都国際会館、岩倉村松に通じている。なお、地下鉄北山駅からは、京都産業大学への直通バスが発着する。

(4) 周辺地域の状況

- 北側の北山通にはカフェ、レストラン、ブティックが軒を連ね、他に類を見ないオリジナルでおしゃれな街並みを形成している。街として一時の活況感に停滞が見られるものの昨今、パーティ会場などブライダル関連施設の集積が進むなど新たな展開がみられる。



※ 北山通の店舗

- 北山通より一筋北、下鴨中通より東、大学南側通より南は、住宅地を形成しており、京都市街地でも特に閑静な住環境を形成している地域が広がっている。

2 北山地域の文化施設

(1) 府立植物園 <約240,000㎡>

- 大正13年(1924年)、植物を育成栽培し広く府民のいこいの場としてこれを公開し、植物の観賞を通じて一般の教養に資するとともに、植物学の研究に寄与するための施設として開園
- 昭和21年(1946年)から12年間連合軍に接収、多くの樹木が伐採
- 昭和36年(1961年)、憩いの場、教養の場としてその姿を一新し、再開園
(その折の様子は、文豪川端康成の代表作「古都」にも表されている)
- 園の植物栽培技術者の努力と計画的な整備により、平成16年(2004年)に開園80周年を迎え、現在では1万2千種・12万本の植物を保有し、日本を代表する総合植物園に成長
- 入園者数：家族連れの府民等、年間約77万人が利用（平成20年度）



※ 京都府立植物園

(2) 府立総合資料館 <13,912㎡>

- 昭和38年(1963年)、京都に関する資料等を総合的に収集・保存・展示して調査研究等一般の利用に供する施設として開設
- この間、国宝の「東寺百合文書」とうじひやくごうもんじょをはじめ国重文指定の古文書・京都府開庁以来の行政文書、古典籍をはじめ多くの図書資料等、第一級の研究価値を有する資料や美術・工芸品等を収集・保存・展示するなど、博物館機能、公文書館機能、図書館機能を併せ持つ複合施設として、学術・教育・文化の発展に大きく寄与
- 利用者数：学生や研究者等、年間約88,000人が利用（平成20年度）



※ 京都府立総合資料館

(3) 府立大学 <123,200㎡>

- 明治28年(1895年)、京都府簡易農学校として愛宕郡大宮村字紫竹大門に設置
- 大正7年(1918年)、下鴨村（現在地）へ新築移転した校舎で授業を開始
- 昭和24年(1949年)、文家政学部(右京区桂)及び農学部(左京区下鴨)の二学部をもつ新制大学、西京大学として発足（昭和34年(1959年)、京都府立大学と改称）
- 平成20年(2008年)、京都府立大学及び京都府立医科大学を設置・運営する公立大学法人を設立するとともに、府立医科大学、京都工芸繊維大学との3大学連携を推進
- 学問の府としての歴史的・社会的使命を認識するとともに、京都府民に支えられ

る府民のための大学であることを自覚し、京都に根ざした魅力的で個性ある大学の創造に向けて新たに取組

- 平成21年(2009年)、公立大学法人化を契機に、府立植物園、府立総合資料館との緊密な連携により、地域や社会に一層の貢献を行うことを目的に包括協定を締結
- 学生数：学部・1,750人、大学院・324人（平成20年度）



※ 京都府立大学

(4) 府立陶板名画の庭 <2,849㎡>

- 平成6年(1994年)、陶板により描かれた世界の名画を自然とのかかわりの中で展示し、広く府民が芸術作品に触れ合う場を提供する施設として設置
- 名画の美しさをそのままに再現した丈夫な陶板画を、安藤忠雄氏設計の施設に展示するもので、屋外で鑑賞できる世界で初めての絵画庭園
- 陶板画は全部で8点。このうち「最後の審判」など4点は「平成2年国際花と緑の博覧会」に出品されたもので、「テラスにて」など4点はこの施設のために新しく制作
- 利用者数：年間約44,000人が利用（平成20年度）



※ 京都府立陶板名画の庭

(5) 京都コンサートホール <9,900㎡>

- 平成7年(1995年)、音楽芸術の振興及び音楽を通じた国際交流の発展に資するため、音楽の鑑賞その他音楽に関する活動の用に供するための施設として完成
- 大小2つのホールと国内有数のパイプオルガンを備え、クラシックコンサート等が行なわれる京都最大級のコンサートホールで、京都市交響楽団の本拠地
- ランダムな凹凸溝を配置した壁面や、不規則な突起物を配置した天井により音響空間を実現
- 利用者数：音楽鑑賞等で、年間約25万人が利用（平成20年度）



※ 京都コンサートホール

3 北山地域の現状

北山地域は、府立施設が集積する中で賀茂川などの豊かな自然環境もあり、府民の憩いの空間となっている。この大都会の中の貴重な空間は、「文化と環境が共生する京都」を内外に発信する魅力ある拠点地域となる大きな可能性を秘めている。

(1) 面積：約38ヘクタール

府立植物園、府立総合資料館、府立大学、府立医科大学グラウンド
府立陶板名画の庭、京都コンサートホール、京都土木事務所、
職員研修・研究支援センター 等

(2) 都市計画等 (地域の主な部分の規制等)

- 用途地域 ~ 第2種中高層住居専用地域（建ぺい率60%、容積率200%）
- 高さ制限 ~ 第一種高度地区（植物園側12m、府立大学側20m）
- 景観保護 ~ 風致地区、美観地区等建築物等の形態、色彩、意匠などに制限がある地域
- 屋外広告物 ~ 屋外看板灯を禁止し、屋外広告物の規制された地域
- 眺望景観 ~ 眺望や景観により建物の高さやデザインを規制している地域

(3) 状況

- 地域の現状は、府立植物園、府立大学、京都コンサートホール、府立総合資料館等が集積しており、府民にとって文化と環境が共生する、豊かな空間となっている。また、多くの研究者や学生が集う、アカデミックな地域でもある。



※ 賀茂川からの北山地域の風景

- 府民にとって身近で個々の施設は高いポテンシャルを持ちながらも、各々が囲まれた閉鎖的な空間となっており、府民にとっても往来しにくい空間となっている。
- 平成21年3月27日に府立植物園、府立総合資料館及び府立大学の3機関が、相互の人的、物的、知的資源を交流・活用し、緊密に連携を図りながら、それぞれが行う事業を充実させるとともに、地域や社会に一層の貢献を行うことを目的として包括協定を締結した。今後、一層各施設が機能的にも有機的な連携を図る中で、府民にとって広く開かれた魅力ある地域となることが期待される。

4 北山地域の課題

(1) 短期的課題

北山地域内の府民・学生・研究者等の活発な往来を創出するとともに、総合資料館と府立大学との集積資産を活用した専門研究の推進、歴史・文化・学術資料や研究成果の府民還元を進め、府立植物園を含めた各施設の機能連携と整備の方向性を定めること。

(2) 中長期的課題

京都の文化・環境・学術の拠点として街づくりを進めるため、ふさわしい新たな文化・学術等の施設整備や、やすらぎとふれあいあふれる街づくりを進めること。

Ⅲ 街づくりの考え方

○ 今後、京都府が日本において、また世界においてもその確たる存在感を保つためには、先人から連綿と受け継がれてきた文化を発展的に伝えること、環境に強く配慮し地球温暖化対策に重要な役割を担うことなど、北山地域の街づくりにおいてもこうした視点を持つこと。

※ 平成9年(1997年)、京都において気候変動枠組条約第3回締約国会議(COP3)が開催され、京都議定書が採択された。

○ また、北山地域は大正・昭和・平成にわたり広く親しまれてきた府民の財産であり、今後、より多くの人々に親しまれ、愛される街をつくる必要がある。

■ 街づくりのコンセプト

- 文化と環境に包まれたやすらぎと交流の中で、京都を世界に発信する街
- 開放感あふれ、歩いてまわりたくなる街

○ 街づくりを検討するにあたっては、街の景観や施設のハードづくりを考える視点である「空間を創る視点」、府民に提供する価値やサービスの機能を考える「機能を整える視点」の、2つの視点からの検討を行った。

空間を創る視点

- 人々が何度でも訪れたいくなる街には、色や形、外観のデザインなど全体として調和のとれた建築物や、安心して歩きやすく、心おどる街路といった空間そのものを構成する要素が必要である。
- 「街づくりの考え方」に沿った空間を創る視点として、次のものが考えられる。

1 文化と環境に包まれた

- 文化的な雰囲気を作る

⇒ 建物を始めとする外観の色や形、デザイン、デコレーションについて調和のとれた文化的な要素を織り込む。

- 地球環境やひとを大事にする空間を作る

⇒ 地球環境にも人にもやさしい素材の採用や設計により、「地球にやさしい府庁プラン」に基づくCO2削減に心掛ける。
⇒ バリアフリーなどユニバーサルデザインの視点を導入する。
⇒ 街灯や発光デザインタイル等太陽光発電を組み込んだものとするなど、環境にやさしい設備とする。

2 やすらぎのなかで

- 日常から離れるところをほぐす空間を作る

⇒ 並木や小川を配するとともに、圧迫感を与えない揃った高さや大きさの建物にする。
⇒ 見た目に優しい色や形を持つ建物デザインなどを採り入れ、日々過ごす町の喧噪や日常生活を忘れさせるような街並み景観とする。

3 交流のなかで

- 様々な想い、価値観を持った人々がふれあい、思わず会話を交わしたくなる空間を作る

⇒ 北山地域の街並みや街路の其処此処に、ベンチなどを配置したり、その場その場で話題となるよう街角デザインや通りに面した建物のつくり配慮する。

- 人々を受け容れ、会話やふれあいを生み、表現の交わりを誘い、期待をふくらませ、街中に溶け込ませていく広場を作る

⇒ 人の流れを自然に呼び込める場に、多くの人々が集える大きな空間、青空スペースを設ける。
⇒ パフォーマンスが自由に表現され、相互に鑑賞しあったり、生み出したりできるアートフリーな空間・広場を設ける。

4 開放感があふれる

- エリア間、施設間、人と施設との間、人とひととの間の壁を感じさせない空間を創る

⇒ 屋外囲い込み型施設である植物園にあっても、他エリアと接する空間が神秘性のベールというコンセプトを保ちつつ、壁とにならないよう工夫を行う。
⇒ 府立植物園、府立総合資料館及び府立大学の包括協定をベースに、域内の諸施設がより高い府民満足や価値の創出が得られるよう、相互に親和性のある空間の創造を行う。

5 歩いてまわりたくなる

- 心地よく歩ける、「人」のための道を創る

⇒ 安全で安心して歩けるユニバーサルデザインの道とする。

- 心を浮き立たせる並木道、景観（施設外観、垣根）を創る

⇒ 北山地域の象徴となる並木道や何度でも足を運びたくなる四季折々の表現を見せる並木を整備する。
⇒ 変化ある垣根、写真を撮ってみたいくなるデザインの街並や街路樹、街灯やベンチを備える。
⇒ 発光タイルや小川などによる「不思議」な空間演出等を行う。

- 施設やエリアを思わず回遊したくなる道を創る

⇒ 次々と興味を惹く景観やそれぞれのエリア毎に意匠や性格の異なる休憩スポット・広場を設ける。
⇒ 施設の表部分に食やアミューズサービス提供機能を点在させるなど、人々をそれぞれのエリアに呼び込む工夫を行う。

- 他のエリア内に足を進めやすくする動線を創る

⇒ 隣りのエリアや建物に回り道することなく足を運ぶことができる街路とする。

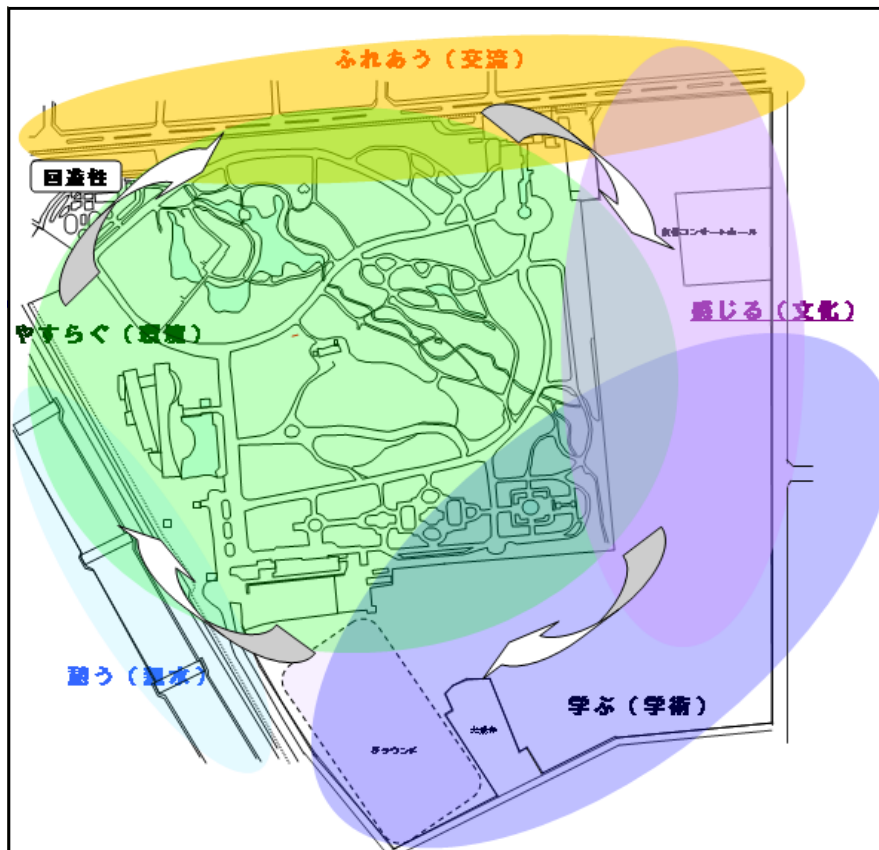
機能を整える視点

- 38haに及ぶ広大な地域を、交通や人の流れ、周辺環境等を総合的に考慮し、次の5つのエリアに分け、そのイメージに沿った街づくりを進めることで、地域のポテンシャルを最大限に引き出す。

■ 北山地域のエリアイメージ

- 感じる（文化）
人々が活発な交わりの中で心を遊ばせる空間 …………… 主として北山通に近い地域
- 学ぶ（学術）
人々が知的な刺激の中で思索を深める空間 …………… 主として北山通から遠い地域
- やすらぐ（環境）
人々が花と緑に抱かれて心を取り戻す空間 …………… 主として植物園地域
- 憩う（親水）
人々が水の流れを前に心を休める空間 …………… 主として賀茂川沿い地域
- ふれあう（交流）
人々がおしゃれな街並みの中でふれあいに心を弾ませる空間
…………… 主として北山通沿い地域

<エリアイメージ図>



■ エリアの機能

京都を世界に発信する

- 立地する各施設間の有機的連携により、京都の地にふさわしい特徴ある知識や知恵の集積を図り、普遍的な価値や文化・環境の時代に相応しい新しいライフスタイル等の発信拠点を目指す。

1 感じる（文化）エリア

- 現在、北山地域にない新たな文化施設の機能整備を図ることで、既存文化施設との相乗効果が期待できる。

⇒ 例えば、舞台芸術系（演劇・舞踊・ダンス等）、視覚芸術系（絵画・写真・工芸・華道・書道等）施設やアートパフォーマンス広場等が考えられる

※ 近隣地域の既存施設

- ・音響芸術（コンサートホール）
- ・造形芸術（陶板名画の庭、植物園、北山街建築物）
- ・ファッション、食（北山街商店街）

2 感じる（文化）・学ぶ（学術）が重なりあうエリア

- 総合資料館と府立大学とが連携する新施設（Ⅳで詳述）

⇒ 京都学センター・生涯学習の支援機能

⇒ 京都情報・歴史文化資料の提供・展示機能

新総合資料館、府立大学文学部研究室、府立大学附属図書館、ホール

3 学ぶ（学術）エリア

- 3大学連携拠点にふさわしい教養教育共同化施設の建設や学生の交流を深めるスポーツ施設等の整備

⇒ 京都工芸繊維大学を交えた連携であり、学生・教員の流れ（連携軸）に沿った位置とする。

- 北山地域にふさわしい農場・スポーツ施設の配置

- 老朽施設について北山地域にふさわしい景観・配置となるよう計画的な整備

- 「学ぶエリア」が人々に親しめるものとなるよう、府民連携機能や生涯学習機能、政策提案機能、府民サービス提供機能を備えた施設群を整備

4 やすらぐ（環境）エリア

- 他施設・エリアと接する面がより交流できるものとなるよう機能整備を行い、一層の連携を強化

- 北山地域内において非常に大きな面積を占めていることから、地域内の回遊性確保に配慮した動線整備

- 内容については、植物園整備計画検討委員会において整理（Ⅴで詳述）

5 憩う（親水）エリア

- 北山地域内の回遊性と植物園との連続性の確保
- 特に植物園正門付近での連続性の確保を図るとともに、賀茂川左岸南側に設置されている地球温暖化対策に係るCOP3記念モニュメントをエントランス・シンボルと捉えた周辺整備

6 ふれあう（交流）エリア

- 北山通から、魅力あふれる植物園や文化・学術エリアに期待を持って向かうことができるエントランスの整備
- 北山通植物園側に、植物園の旬の魅力を伝えるショーテラス・ショーウィンドウを設置するなどによるふれあい空間の整備
- 「やすらぐ」、「憩う」、「ふれあう」エリアが重なる京都土木事務所については、この地域にふさわしいあり方を検討

Ⅳ 総合資料館と府立大学とが連携する新施設の整備の方向性等

- 新しい総合資料館については、「総合資料館基本構想」（以下、「基本構想」と略記。20年度、総合資料館基本構想検討委員会策定。）を基本に府立大学等との連携の格段の強化を図るとともに、「北山文化環境ゾーン整備推進」全体の観点から府立大学の施設の一部との合同整備を進める。

1 新施設の目的・性格

- 新施設（新しい総合資料館、府立大学文学部研究室・附属図書館などの新たな建物・設備全体をいう）は、京都の歴史・文化に関する資料を収集・保存・調査・研究するとともに、広く一般に提供し、その調査・研究や学びを支援し、国内外に情報を発信する拠点とする。

2 新総合資料館と府立大学との連携強化による新施設の新たな機能の発揮

- 総合資料館と府立大学の連携強化こそが「基本構想」で示された新施設の機能活性化の鍵であり、以下、その連携強化の具体化方策を提示する。

(1) 「国際京都学センター」を設置し、全国的・国際的交流と情報発信の拠点とする。

① 国際京都学センターの設置

- ・ 新施設に、「国際京都学センター」（以下、センターと略記。）を設置する。
 - ⇒ センターの基本的役割は、新資料館が収集・保存する豊かで質の高い京都関係資料等を駆使した京都の風土・歴史・文化等に関する高度な資料利用に対応し、高度な研究を推進、広く国内外にその成果・情報を発信し、府民のニーズに応え、その生活と文化の発展向上に寄与することにある。

② センターの主な二つの機能

(i) 高度な「京都学」の構築・研究推進のコーディネーター

- ・ 資料利用の高度化を進め、京都の風土・歴史・文化等に関する高度で革新的な総合的・学際的研究としての「京都学」研究を構築・推進するため、コーディネーターの役割を果たす。
- ⇒ この研究は、京都地域の「郷土研究」であるとともに、京都の持つ歴史的特性から当然のことながら「日本文化研究」ともなる。
- ⇒ 府民的意義と同時に全国的・国際的に大きな意義もつことから府民向けと同時に全国的・国際的にも積極的な交流と情報発信を展開する。

(ii) 京都研究の啓発・普及・支援活動の拠点

- ・ 豊かで質の高い京都に関する情報を、広く一般にわかりやすく提供し、京都に関する調査・研究や学習の啓発・普及・支援に努め、「京都発見」の旅の拠点とする。
- ⇒ 地域社会や関係機関と共同して文化的産業の開発・活性化に寄与する。

③ センター設置に不可欠な総合資料館と府立大学の合同整備

- ・ 収集・所蔵資料に関する専門的調査研究の蓄積と知識を持つ総合資料館と、文学部をはじめ京都の歴史・文化はもちろん、自然・社会・文化遺産等々について優れた知見と高度な研究能力を有する府立大学全体との連携の格段の強化によって、センターの設置ははじめて実現可能となる。
- とりわけ、府立大学文学部との直接的な連携強化は不可欠である。

④ センター施設の整備方向

- ・ 施設は、センターの機能が十分に可能となるよう、京都学のコーディネーター、京都研究の啓発・普及・支援活動を担う拠点等を備える必要がある。
- ・ なお、センター機能を十分に発揮させるため、新総合資料館・府立大学文学部研究室・府立大学附属図書館の機能が一つの建物内に整備され、必要な共同研究室やホール及び学術研究団体や府民・来館者が自由に利活用できる空間などが整備されることが望まれる。

(2) 連携強化による他の新たな機能の発揮（府民サービスの向上）

- ① 府立大学との連携強化により、双方の収集・所蔵資料等の一層広範で利便性に富んだ府民提供方策を開発する。
- ② より豊かで活用しやすい京都調査・研究等に関するレファレンスの積極的展開。
- ③ 府民との一層多様な研究・学習交流の場の提供。
- ④ 両機関の特性を活かした院生や学生対象の各種教育プログラムの共同開発とその社会人への提供。
- ⑤ これらをはじめ、両機関の連携による新事業の展開については、双方の独自性を踏まえつつ、創意に満ちた工夫を重ねることによって、府民サービスの一層の向上を目指して具体化する。

3 新総合資料館等の新たな機能の展開

(1) 新総合資料館

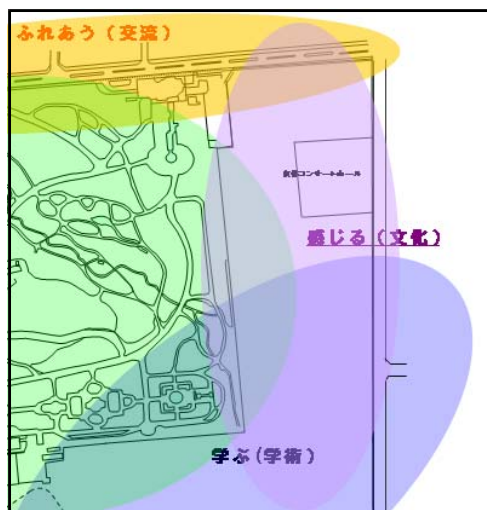
「基本構想」で提案された基本方向の具体化

- ① (i) 京都に関する資料の収集・保存と積極的活用
(ii) 公文書館機能の拡充
(iii) 研究・学習・教育支援とネットワーク機能の強化
(iv) 北山地域のなかの総合資料館
という「基本構想」の基本方針と重点事項で提起された体制整備等諸課題の具体化を整合性をもって進める。
- ② 府立大学以外にも、「基本構想」でも掲げられている府立植物園などとの連携の具体化を重視する。
- ③ 府立の図書館や郷土資料館をはじめ、府域の関係諸機関との連携の推進方策の具体化をし、可能な範囲から実施する。

(2) 府立大学文学部研究室及び同附属図書館

- 3機関の包括協定に基づき、共同企画による所蔵資料の展示や府民講座開催、施設・設備・資産等の共同利用や相互活用等、新総合資料館等との連携を強化する。

4 新施設の位置等



○ 以上のような施設の性格、機能を踏まえると、多くの人が気軽に集いやすい位置にあるとともに、学習や研究という知的でアカデミックな活動を担保する、知的な環境や雰囲気を用意する位置にある必要がある。

○ 具体的には、北山地域のエリアイメージとしては、「感じる(文化)」と「学ぶ(学術)」がオーバーラップしているあたり、また、新施設の機能面からは、京都学の振興を大きな目標としている府立大学エリアにもかかる位置あたりがイメージされる。

- 建物は街づくりのコンセプトに沿った外観・規模とし、備える機能は府民サービス及び利活用実態の視点から十分な検討が必要である。

5 新施設の名称

- 新総合資料館・府立大学文学部研究室・府立大学附属図書館を合同整備する新施設について、統一的な名称を付す必要がある。
- また、新総合資料館については、親しみやすく、機能をわかりやすく表すような名称についての検討が必要である。

V 府立植物園の整備の方向性等

○ 府立植物園については、平成19年策定の「府立植物園の未来図」夢プランを踏まえ、府立植物園施設整備計画検討委員会において施設整備計画が検討されている。

当委員会では、この検討状況を踏まえつつ、北山地域全体の観点や府立総合資料館や府立大学等との一層の連携強化の観点を加えたものをもって、本委員会での方向性とする。

1 施設の目的・性格

○ 人々が花と緑に抱かれて心を取り戻す、そうした安らぎの空間に一人でも多くの府民・人々に足を運んで頂くため、日本一おもしろく、心やすらぐ植物園を目指す。

*おもしろい：心ひかれる、興味深い、楽しい

2 施設の機能

○ 生きた植物の博物館としての機能を充実させ、府民・人々が興味を持ち関心を高め、何度でも行きたくなるようなワクワクする展示や品揃えをし、知識を提供する。

○ 府立大学の学生や院生の教育・研究フィールドとして活用するなどの機能連携を進める。

(1) 心をひかれる機能

○ 「見てもらって、分かってもらってなんぼ」であって、思わず入りたくなる施設や興味をいだく展示方法などの工夫により、植物園に興味や期待感をもってもらえるような施設整備を行う。

- ・ 北山地域全体との関係では、正門、北山門に加え地域内の回遊性の確保の観点から文化や学術エリアとの往来が可能となるエントランスの整備が必要であるとともに、賀茂川との円滑な接続が可能となる施設整備
- ・ 見ごろの植物やイベントなど、植物園の魅力を外側に伝えるショーテラスやショーウィンドウのスペースを設けるとともに、周囲全体にわたる垣根・植え込みが神秘性のバールとして、壁と感ぜさせないインターフェースとなるよう整備

(2) 目をみはる機能

○ 植物園の使命である「生きた植物を生かしたまま後世に伝え残し続ける」とともに成果を府民に還元するため、その多様性を展示し鑑賞してもらう「多様な生きたほんまもんの植物展示」やそれを支える「技の継承」ができる体制・施設整備を行う。

- ・ 北山地域全体との関係では、地域内の回遊性を生む植物殿堂館や展示・相談施設を整備

(3) 心やすらぐ機能

○ 洛中であって、安心してのびのび過ごせ、緑に心を浸し日常を忘れることができる現代人のこころのオアシスとなるよう、又、心豊かに京都の文化や古典に思いを馳せることのできる施設整備を行う。

- ・ 北山地域全体との関係では、地域内の回遊性を生む文豪・川端康成ゆかりの『古都』の並木道ややすらぎスポットの整備

Ⅵ その他検討を要する課題

本件の基本的な「街区構想」を更に具体化し、将来的な建物配置・動線・人の流れや、今回具体的に検討した新総合資料館、植物園以外の施設整備等について検討する、整備委員会を継続して設置する。

本件の街づくりの考え方に沿って具体化した構想を、円滑に推進するための「推進委員会」を設置する。

大規模な面的ハード整備を伴うものであり、「街」という概念から、広く民間のノウハウや資本等の活用による整備についても検討する必要がある。

以 上

◇ 北山文化環境ゾーン整備推進委員会委員

(委員は50音順)

氏 名	現 職 名
白幡 洋三郎	国際日本文化研究センター副所長 (委員長)
東 昌司	(財)京都府立植物園協力会副会長
有賀 美砂	(株)京都新聞社論説委員
井口 和起	京都府立総合資料館館長
北沢 猛	東京大学大学院新領域創成科学研究科教授
公文 俊一	北山街協同組合理事長
竹葉 剛	京都府立大学学長
中川 大	京都大学大学院工学研究科教授
中野 淑夫	公認会計士
松谷 茂	京都府立植物園園長

◇ 検討経過

	開催年月日	主な検討内容等
第1回	平成21年4月24日(金)	<ul style="list-style-type: none"> ・委員会の設置 ・ゾーンの現状確認 ・街づくりコンセプトの共有
第2回	平成21年5月22日(金)	<ul style="list-style-type: none"> ・ゾーンのエリア構成 ・新総合資料館の整備の方向性
第3回	平成21年6月19日(金)	<ul style="list-style-type: none"> ・新総合資料館の機能と位置等 ・新総合資料館と府立大学の連携等
第4回	平成21年7月17日(金)	<ul style="list-style-type: none"> ・検討報告(案)
第5回	平成21年10月1日(木)	<ul style="list-style-type: none"> ・報告書とりまとめ